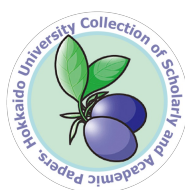




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	巻頭言 : たったいくつものかたり : 歴史コミュニケーションの視点から
Author(s)	宮本, 道人
Citation	科学技術コミュニケーション, 35, 59-60
Issue Date	2024-09
DOI	https://doi.org/10.14943/111792
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93243
Type	editorial
File Information	jjsc35_06_Miyamoto.pdf



小特集

たったいくつものかたり

～歴史コミュニケーションの視点から～

1. なぜ歴史コミュニケーションか

一人ひとりの、真偽が確定しにくい語りの積み重ねの上に、無数の解釈が生まれ得る「史実」。それは、過去の過ちを繰り返さないためのヒントになるけれども、扱い方ひとつで社会の分断を生む原因にもなる、複雑な存在である。

近年 SNS において、エンターテインメント作品の歴史の扱い方が摩擦を引き起こす事例が話題となることも多い。例を挙げると、フランスに本社を置くユービーアイソフトによるビデオゲーム『アサシン クリッド シャドウズ』における日本描写の歴史的正確性についての議論や、日本のバンド Mrs. GREEN APPLE の曲『コロンブス』のミュージックビデオの描写に対する植民地問題への配慮についての議論などが代表的である。ここではこれらの描き方やその是非について論じることが主眼ではないため、内容についての詳述は避けるが、いずれも歴史認識の甘さや無意識の差別が含まれているのではないかという指摘がなされ、インターネット上で大きな炎上を引き起こしていた。こういった状況下では、SNS で発信を行う市民一人ひとりが歴史に関して一定のリテラシーを持つことを要求され、どのような立場を取るのかの判断を迫られる場合もある。

このような社会問題は、歴史に関するものではあるが、価値観の問題でもあるため、歴史家のみで是非に関する完全な結論を出せるわけではない。冷静で実りある対話や創作を行うためには、従来の歴史研究や歴史教育とは近くもあるけれども別種のコミュニケーションの方法論が求められる。すなわち、科学技術コミュニケーションが現代社会において重要度を増しているのと同様に、歴史に関しても、その面白さや課題を伝え、社会と対話していくコミュニケーション分野の確立が必要なのではないかと考えられる。

あるいは、こうした分野はまだ一般的に認識される名称がつけられていないだけであり、すでに多数の実践例があるという認識もできるかもしれない。こうした事例を把握していくことは、逆に科学技術コミュニケーションにもたらしものも大きいであろう。

このような課題意識から、2024 年 3 月 9 日、CoSTEP の修了記念シンポジウムとして、「たったいくつものかたり ～歴史コミュニケーションの視点から～」(主催:北海道大学 CoSTEP, 協力:北海道大学共創教育センター, 北海道大学 Ph.Discover)を開催した。

「歴史コミュニケーション」という言葉は、「歴史コミュニケーション研究会」などですでに一部使用されている用例はあるものの、それほど一般的な用語ではなく、Google 検索などでも関連するウェブサイトはほとんど掲示されない。そこで、本シンポジウムでもあえて「歴史コミュニケーション」という言葉を正確に定義せず、講演やパネルディスカッションを通してこの分野の輪郭が立ち現れてくることや、来場者がその言葉について自ら考えることを狙いとした。とはいえおおよその方向性としては、歴史に関して社会と対話を行う活動を歴史コミュニケーションと考え、シンポジウムにはこのような活動に関して深い知見と豊富な経験を持つ三人のゲストを招き、その実践や事例、キャリアなどについて、それぞれの講演と全員でのパネルディスカッションを通して話を伺った。

2. シンポジウムの概要

1 人目の登壇者、東京大学大学院 情報学環 客員准教授の池尻良平は、歴史のゲーム教材やデジタル教材を開発しつつ、高校で実践・評価している研究者である。池尻からは、「歴史のコミュニケーションとデザイン」というタイトルで、デジタルゲーム、アナログゲーム、Web アプリといった形式で歴史にふれる事例が紹介された。

2 人目の登壇者、スタディサプリ 社会科講師の伊藤賀一は、オンライン動画のプロ講師として人気であると同時に、歴史を紹介する本を中心に 70 冊を超える著書を執筆している。伊藤からは「一学士からの話題提供」と題して、自身の進んできたキャリアや、これからの教育についての話が語られた。

3 人目の登壇者は、北海道大学 アイヌ共生推進本部／国際広報メディア・観光学院 准教授の岡田真弓である。岡田からは、「ヘリテージと歴史コミュニケーション」と題して、自身の専門であるパブリック考古学と文化遺産研究（ヘリテージ・スタディーズ）に関連する事例が語られた。パブリック考古学とは、考古学が現代社会、あるいは歴史のある時点で、どういうふうと考えられ、活用されていたのかを考察したり、考古学と人々との間にある課題を実践を通して解決するといったことを考える分野である。ヘリテージ・スタディーズは、ヘリテージ（遺産）と人々の相互関係を考察する分野である。

3 人の講演の後、パネルディスカッションを行った。事前に CoSTEP 受講生から集めた質問などをもとに、テーマを 6 つ設定し、3 人の登壇者と聞き手の宮本道人（CoSTEP 特任助教）で議論を行った。歴史コミュニケーションを行う際に重要になる点があらかじめ語られたり、科学技術コミュニケーションと歴史コミュニケーションの共通点や違いなどについて意見が交わされた。

本稿は、以上のシンポジウムを元にした小特集である。シンポジウムタイトル「たったいくつものかたり」には、以下のような思いが込められている。すなわち、一人ひとりの語りはものすごく大切なものだけれど、複数になると、その大切さがよく分からなくなってしまうたり、いくつかの言葉がぶつかって難しい扱いになったりするからこそ、「たったひとつ」ではなく「たったいくつもの」かたりを大事にすべきという考えである。

こういった難しさの上に成り立つ歴史コミュニケーションであるが、本稿を通してその可能性と意義を考えていただければ幸いである。

文責：宮本 道人（CoSTEP 特任助教）